劇音楽の教材研究について
– 作品の背景に着目して (1) –

小　原　伸　一

宇都宮大学教育学部紀要
第61号　第1部　別刷
平成23年（2011）3月

On Teaching Material Research of the Drama Music :From the Viwpoint of its Background (1)

KOHARA Shin-ichi

劇音楽の教材研究について
– 作品の背景に着目して (1) –

On Teaching Material Research of the Drama Music
:From the Viwpoint of its Background (1)

小原　伸一
KOHARA Shin-ichi

はじめに

音楽作品が完成に至るまでには、その最初となる着想を含め、作品ごとに様々な経緯がある。そこには、作曲家が作品を書きたいという意志を持ち、構想を練り、作曲を開始し楽譜に記し完成させるということが含まれている。劇音楽の作品も制作の開始から完成まで基本の流れは同じである。しかし、総合芸術であるオペラを含め、劇音楽の作品ではその他のジャンルの音楽作品には無いいくつかの特異な仕事が含まれている。

例えばオペラでは、その構想段階で物語りや登場人物などの設定を行い、それと同時にどの登場人物にどの声種を割り当てるかといった声に関わる事など、が考えられる。この他にも、台本の変更や調整など、音楽が付けられる前に様々な作業が行われる。

ところで、こうした作業は台本が決まらないと着手することができない。台本の選択と決定、これがオペラ制作における一番最初の、そして重要な作業である。このことについて少し詳しく考えてみることにする。

台本の選択･決定の経緯は、作曲家や作品ごとに様々な状況が見られるが、共通して言えることは、これから書こうとするオペラの主題を捜し求める作曲家の姿をそこに垣間見ることができるということである。台本の決定は、作曲家自身が主体的・積極的に選んでいる場合もあれば、他者からの提案などによって決まる場合、あるいは偶然の出会いといった場合もある。中には色々な事情で作曲家自身があまり興味を持てないものであったり、仕方なく引き受けたという場合もある。ここで大切なのは、積極的であれ消極的であれ、作曲者の台本に対する姿勢である。なぜなら、どのような状況であれその出発点における台本への姿勢が、完成した作品に様々な形で反映していると考えられるからである。

このように考えると、選ばれた台本にはそれを選んだ作曲家自身の発想を考える手掛かりがあることがわかる。作曲家が何故その台本に決めたのか、音楽を通して何を描こうとしたのか、原作のどの部分をオペラという音楽作品の中に実現できると考えていたのか、これらの疑問を明らかにする情報が台本の中に隠れている。教材研究はそうした発想の手掛かりを作品から探し出し、作曲者の作品に対する態度や考えを明らかにすることでもある。なぜなら、そのことよって作品の意図が分かるということに繋がるからである。

もう一つ重要になるのが台本の中の台詞（歌詞）である。オペラにするためには選択・決定した原作を作曲可能な台本の形にする台本制作が不可欠である。完成した台本は、ほぼそのまま歌詞になるか、あるいは地の台詞として舞台で使える形になっていなくてはならない。そのため、戯曲や小説な

どの原作は多くの場合そのままオペラの台本にするのではなく、オペラ作品に必要な内容が原作から取捨選択される。また、必要に応じて新たな要素が追加されることもある。その結果、台本は原作とは異なったものとなる。この改訂も千差万別で、あまり手を加えないものから全く別物と言ってよいほど変えられてしまう場合まである。ここでも注目すべきことは、その変更の程度の大小ではなく、歌詞の土台となる台詞の「言葉」の中に作品の背景となる様々な情報が存在しているということである。そして、それは作品の意図を知る重要な手掛かりとなるのである。

そこで台本の内容と関連する様々な背景に着目し、その考察から作品を読み解く具体例を示すことにしたい。作品にはヴェルディ作曲の歌劇《第一回十字軍のロンバルディア人たち》[注1] を用い、最初に作品の概要を提示し、次に作品に含まれる地理・歴史及び宗教の背景について考察する。

なお、この作品に対する全体の解釈は、以下の考察以外に、作曲者ヴェルディと台本決定の経緯といった背景も加えた上で行いたいと考えている。本論では、台本の内容と直接関連する背景までを扱うことにする。

1. オペラ《第一回十字軍のロンバルディア人たち》の概要

1. 1　物語りの概要

最初に、本作品の概要を主要な登場人物の間における恋愛感情に絞って記すことにする。以下の概要は、本論の２. 以降で詳述する作品の背景について予備知識が無いことを想定し、作品に含まれている歴史や地理、民族、宗教などの要素（＝背景）を除いて、誰でも理解できる人間感情（恋愛・憎悪等）の関係に限定してまとめたものである。

ある都に兄弟がいた。兄はアルヴィーノ、弟はパガーノという。二人の兄弟は一人の女性を同時に愛してしまった。この女性は兄と結婚したので、弟は彼女を奪った兄を憎み復讐を誓った。弟は兄の暗殺を計画、実行するが失敗し都を追放される（ここまでは前置きで、オペラは次の部分から始まっている）。

十八年後、兄には一人娘ジゼルダがいた。兄は弟を許して都に呼び戻し和解する。弟は表向き改心を装うが内心では兄への復讐心を抱き続けていた。そして再び暗殺を決行、しかし今度は過って兄の代わりに父親を殺してしまう。二度命を狙われた兄は怒り、弟を都から永久追放の刑に処す。追放された弟は陰者となる。その後、兄は指揮官として遠征に出る。（第１幕）

さて、兄の娘ジゼルダは誘拐され別の国に監禁された。しかし、その国の皇子オロンテは監禁中の女性ジゼルダを愛し、ジゼルダもまた皇子を愛していた。そこへ兄が遠征して来る。陰者（＝追放された弟）の助けで兄は敵の防御を突破し、皇子を殺傷し自分の娘を救出するが、恋人を失った娘は父を激しく非難、親子は対立する。（第２幕）

その後、娘はさらに進軍する父の監視から逃亡、生き延びた皇子と偶然再会する。お互い愛する気持ちを確かめ合うが、重傷を負った皇子は娘の腕の中で死んでしまう。愛する者を失った娘は悲しみに暮れる。（第３幕）

その夜、娘は夢で亡き皇子からメッセージを聞く。それは父アルヴィーノの軍隊を勝利に導くものであった。娘は陰者に案内されてメッセージを携え父のもとへ帰る。そこで父娘は互いに和解し、今度は一致し、陰者も加わり遠征最後の戦いに臨み勝利を獲得する。戦いで陰者は負傷、死際に正体を

注1　原題 *“I lonbardi alla prima crociata”*

明かす。陰者が弟とわかり兄は彼を許す。彼は兄とその娘に見守られて息絶える。（第４幕）

この概要では、全体を通して「兄」「弟」「兄の娘」の三人（いずれもロンバルディア人）が主要な登場人物となる。それぞれの人物の間にある感情の関係を簡略化すると「兄弟間の憎しみと復讐劇、及び父娘の対立とその解消」に集約される。どちらも原因の根底は恋愛感情にあり、そこから派生した復讐心や怒りによって、子（=弟）による父親の殺害（殺人）と、父（=兄）による娘の恋人の殺害（傷害致死）という事件が加わる。最後は互いに許し合い、先に死別する者（皇子、弟）は愛する者たちに見守られながら最期を迎える。これをさらに単純にすれば「失恋の復讐から端を発したこの物語りは、事の張本人の悔悛と死によって終わる」となる。これがオペラの物語りの骨子である。ここではオペラの主人公（重要人物）を「弟」のパガーノと考えることができる。

１．２　音楽の概要

物語りの概要では、オペラの主要人物は三人のロンバルディア人で、「弟」のパガーノがその中心人物であった。ここでは、この三人の主要な登場人物に書かれている音楽について確認したい。以下は楽譜[注2] から三人の主要曲を一覧表にまとめたものである。

【表１】

	兄（アルヴィーノ）	弟（パガーノ）	兄の娘（ジゼルダ）
第１幕	①三人を含むアンサンブル（兄は不安、弟は復讐心、娘は平安願う気持ちを歌う） ‘Di gioia, di gioia immensa’ (Giselda) 「私の心には限りない喜びがあるというのに」（ジゼルダ）		
		②アリア ‘Sciagurata! hai tu creduto’ 「愚かな女よ！お前は信じていたのか」	③アリア ‘Salve Maria!…’ 「マリア様…」
第２幕	④二重唱 ‘Sei tu l'uom della caverna?…’ (Arvino) 「あなたは洞窟の住人でしょうか？」（アルヴィーノ）		⑤ロンド・フィナーレ (アリア) ‘O madre, dal cielo soccorri al mio pianto…’ 「ああ、お母様 天上から私に涙の救いの手を…」
第３幕	⑦アリア ‘Si!…del ciel che non punisce’ 「そうだ！…天が罰しないことを…」		⑥二重唱 *1 ‘Teco io fuggo!’ 「あなたと一緒に逃げます！」 (*1 オロンテとの二重唱)
	⑧プレリュード（ヴァイオリン独奏付前奏曲）		
		⑨三重唱 *2 ‘Qual volutta trascorrere’（Oronte） 「なんという歓びが駆け巡る」（オロンテ） (*2 オロンテを加えた三重唱)	
第４幕			⑩アリア ‘Non fu sogno! … In fondo all'alma’ 「あれは夢ではなかった！…魂の奥底で」
	⑪三重唱（兄の弟への許し、弟の懺悔、娘の慈悲深い祈り） ‘Ah taci!…taci!…’（Pagano) 「ああ　黙っていてくれ…黙っていてくれ…」（パガーノ）		

注2　Verdi, Giuseppe. *I Lombardi alla prima crociata : Dramma lirico in quatro atti* .：Ricordi (2007)
以下、本文の「楽譜」はこれを指す。

【表１】から三人ともアリアが与えられており、お互いのアンサンブルもあることがわかる。なお、第３幕には三重唱の前に、オペラとしては異例の（突然に挿入され、楽曲が長く、協奏曲のような[注3]）前奏曲⑧があるが、この曲については後で触れることにする。

登場人物ごとの楽曲の数は、「兄」がアリア１曲とアンサンブル３曲、「弟」同１曲と４曲、「兄の娘」同３曲と４曲になっている。アリアとアンサンブルの合計では順に４曲、５曲、７曲で「兄の娘」が最も数が多いことがわかる。

アリアとアンサンブルの割り当てからわかる特徴は二つある。一つは「兄」のアルヴィーノや「弟」パガーノはアリアがそれぞれ１曲であるのに比べ「兄の娘」ジゼルダはアリアが３曲と多いことである。もう一つは「兄の娘」ジゼルダに第１幕から第４幕まで全ての幕で演奏曲があり、全編を通して登場して歌う場面が与えられていることである。音楽面ではこのジゼルダの比重が大きいことがわかる。

オペラは総合芸術であるが登場人物の声楽要素はやはり大切である。登場人物の作品における重要度がそれぞれに割り当てられた楽曲の数に比例していると考えるならば、音楽において「兄の娘」ジゼルダは最も重要な登場人物だといえる。つまり、音楽の構成から考えると、このオペラの主人公はジゼルダであるということになる。

ここまでで、物語りの中心人物は「弟」パガーノであり、音楽の中心人物は「兄の娘」ジゼルダであった。しかし、この登場人物の役割を総合的に判断するためには、個々の性格や相互の関係などもふまえ、オペラ全体から考えなければならない。そのためには、その根拠となる別の視点、つまり作品が持つ別の背景について考えることが必要となる。

そこで、ここまで除外していた作品の様々な背景を対象に考察する。背景には、本作品を特徴付けている点から「歴史」「地理」「宗教」の３項目を設定した。なお、各項目は相互に関連しているため、設定したキーワードごとに必要に応じて内容を記述することにした。

２. オペラ《第一回十字軍のロンバルディア人たち》[注4] 作品の背景

背景の具体的な考察に入る前に、作品について簡単に触れておくことにする。

このオペラは、ヴェルディが２９歳の頃に作曲した四番目のオペラ作品で、１８４３年２月１１日にミラノ・スカラ座で初演された。作品名が示すように、第一回十字軍の遠征と遠征に参加したロンバルディアの人々[注5]が描れている。

作品の時代設定は総譜に記載がない。永竹（2002）はこの時代設定を「第一次十字軍時代（１０９６～９７）」[注6]としているが、終わりの９７年は、第一回十字軍遠征が終了した１０９９年と考え、

注3　永竹（2002）p.68　この前奏曲について永竹は「ヴェルディは何故、ここにオペラ史上初めての、こんな長いヴァイオリン協奏曲のような音楽を入れたのか。まず第一に、その時スカラ座のコンサート・マスターが名手であったことも理由にあげられようが、やはり、ヴェルディとしては序曲を書かずに、ここにヴァイオリン協奏曲的な曲を入れて実験をしているのだと思う。」と述べている。

注4　以下、本文では本作品名を《ロンバルディ》と記す。

注5　第一回十字軍の主要部隊は、フランスを起点にレイモンやゴドフロワ等、主にフランス人に率いられた。ホプキンズ(2005）では主要部隊の進路を、フランス北部のベルダンを起点とするゴドフロワ軍はアルプス山脈北部を西へ進むルート、クレルモンを起点としてレイモンを含む軍はフランス南部の都市トゥールーズを経てジェノアからアドリア海岸へ至るルートで進んだとしている。この中でロンバルディア地方を通過しミラノがルートに入る可能性があるのはレイモン軍である(橋口（1974）pp.72-73 地図参照)。オペラで設定されたロンバルディア人がこの部隊に参加したかどうかは明確ではない。イタリアからは南イタリアから遠征に加わり、アンティオキア攻略で活躍したボエモントがいたが、彼はノルマン人である。

注6　永竹（2002）p.57

１０９６～９９年としてよいだろう[注7]。場所は総譜に記載があり、第１幕がミラノ（ロンバルディア地方の中心地）、第２幕が遠征先のアンティオキアとその近郊、第３幕と第４幕が目的地イェルサレムの近郊となっている。

タイトル中のロンバルディア人とは、ロンバルディア地方の人を指している。ロンバルディアは、イタリア共和国北部にあり同国最大の平原地帯を指している。現在はロンバルディア州が置かれミラノはその州都となっている。州北部にはアルプス山脈の南に位置するコモ湖などがあり、州南部にはクレモナなどの都市がある。その近く、平原の中央を東西に流れるポー川は南側隣接州との境界になっている。このクレモナの近くにヴェルディの生地、レ・ロンコレ村がある。つまり、ヴェルディ自身もロンバルディア地方の出身であり、ロンバルディア人ということになる。

以上から《ロンバルディ》は、ロンバルディアと地縁のあるヴェルディが、ロンバルディアの中心地ミラノから出発した十字軍の遠征を、ロンバルディア人たちを主要な登場人物に設定した物語り（台本）をもとにオペラ化にした作品、と考えることができる。

このように考えると、作曲者ヴェルディは台本の選択と決定において、題名に含まれていた「ロンバルディ」という名称になんらかの思いを持ってオペラ化を構想したと考えられる。この他にも作品への多様な思いがあったはずである。では、それはどのようなものであり、作品にどう反映されたのか、様々な背景の理解をもとに考えることにする。

２．１　歴史的背景〈十字軍〉

《ロンバルディ》における物語りは第一回十字軍の遠征とともに展開しており、主な登場人物は十字軍に関与している。ここでは、歴史上行われた第一回十字軍の性格を明らかにし、その背景から作品の音楽について考える糸口へと繋げることにしたい。

十字軍（Crusade）は「１１世紀末期～１３世紀の間、ヨーロッパ諸国のキリスト教徒が聖地イェルサレム回復のために起こした大遠征軍」[注8]である。遠征は１０９６年の第一回から１２７０年の第七回まで行われた。中でも最初の第一回十字軍は、聖地イェルサレムをセルジューク朝支配から回復するという目的を達成した唯一の遠征であり、聖地回復によりゴドフロワを治世者としてイェルサレム王国を建国した。

この十字軍は１０９５年、フランス中南部の町クレルモンで開催されたクレルモン会議で、主宰者の教皇ウルバヌス二世が最初の十字軍召集を行ったのが始まりとされる。その召集演説には以下の項目[注9]が含まれていた。

一、トルコ人の侵入と東方のキリスト教徒の苦難
二、東方のキリスト教徒救援の必要。
三、相互の不正な内戦の代わりにトルコ人に対する正義の戦いを行うべきこと。
四、贖宥。
五、東方の富ないし掠奪品への期待。
六、家族や財産への愛着など何ものによっても出発を延期すべきではないこと。
七、神が先導者であること。

注7　十字軍は開始が1096年、アンティオキアに1097年到着し1098年に攻略、最終目的地イェルサレムの陥落が1099年である。オペラに当てはめると、ミラノを出発する第１幕が1096年、アンティオキアを攻略する第２幕が1097～98年、イェルサレムに至り陥落するまでの第３、第４幕が1098年～1099年となる。

注8　『世界史事典』昭文社（2001）p.332

注9　八塚（2008）p.33

クレルモン会議では、この他に、十字軍の由来ともいえる「十字」の印を参加者が各自の衣服に付けるよう定めている。この十字の印を付ける意味について、八塚（2008）は次のように述べている。

> 十字の印を付けるのは、福音書の記述により、キリストに従って自らの十字架を負うことを示すのだが、他にも重要な意味があった。一つは誓願の記しとしてである。つまり、十字軍に参加を表明した以上は、同時にその任務は必ず果たさねばならない。その誓いを可視的な形で表したものが、十字の印だったのである。[注10]

ここで、文章中にある次の表現に注目したい。それは、参加者が十字の印を衣服に付けることを「十字架を負う」と表現している点である。これはどういう意味なのだろうか。これを理解するための説明を補足しておきたい。

一般に「十字架」の語義は「罪人をはりつけにする十字形に組み合わせた柱」[注11] であり、「十字架を負う」は「永久に消えることのな無い罪を身に持つ」[注12] と説明されることがある。この解釈によれば、十字軍に参加することは、許されることのない罪を永遠に持ち続けることを参加者が自ら示す、という意味になる。

しかし、このままでは本来の意味は伝わってこない。つまり、この解釈では、生涯重い責務を担い続け未来永劫不幸な人生を送る、という内容になってしまうのである。山内（2003）[注13] が指摘しているように、十字軍に参加した多くの人々はその地位や身分にかかわらず、私有財産を投げ打ってさらに借金までして遠征資金を作りキリスト教徒救援のために労役を無償で提供した。これはその決意の動機とするには相容れない内容である。

そこで、前掲引用文中の「福音書の記述により」という部分と、十字軍召集演説の第四項目にある「贖宥」の意味をふまえて考えてみる。

「十字架を負う」は前掲の召集演説においてウルバヌス二世が語った言葉の中にあり、新約聖書の「マタイによる福音書」から引用されたという。福韻書の原文は「自分の十字架を負って私について来ないものは、わたしにふさわしい者ではありません」(マタイによる福韻書10章-37節[注14]) となっている。ここで「十字架を負う」とは、そうすることでわたし（= キリスト）にふさわしい者となることである。つまり、十字架上で自分の代わりに罪を贖ったキリストによって自分が罪から解放される者となる、ということである。

また、十字架について、山口（2000）は次のように述べている。十字架はキリストの磔刑に用いられたが、その後キリスト教においては「十字架そのものにイエスの勝利を見い出している。また、罪の贖の道具とされた十字架に対して、死、苦しみ、血などの語と共に救いの希望を暗示する重要なことばとなった（傍点筆者）」[注15] 。ここから「十字架を負う」は「救いの希望を背負う（= 救いの希望を得る）こと」と考えることができる。

注10 八塚（2008）p.49
注11 『新明解国語事典』第二版（1974）p.502
注12 ibid., p.502
注13 山内（2003）pp.82-83　山内は十字軍参加者の負担を「長距離の旅や戦いの中での死の確立はきわめて高いものだった。捕虜となり、奴隷にされるかもしれなかった。武器の調達も旅の費用もすべて自己負担だった。留守の間に生まれるであろう経済的、法的問題も計り知れない。経済的にはとても割に合わない話である。」と述べている。当時十字軍に参加するためには相当な覚悟があったことがうかがわれる。
注14 新改訳『新約聖書』日本聖書刊行会（2000）p.16
注15 山口（2000）p.290

「贖宥」は（罪の）贖いが許されるという意味で、後の時代、１４世紀頃からカトリック教会が発行し、ルターによる宗教改革の発端となった「贖宥状」[注16]も同じ言葉が使われた。八塚（2008）は贖宥を「十字軍に行けば犯した罪の償いが免ぜられるということである。それによって罪が消えるのではなく、罪としての償いが免ぜられる。–中略–　より平易にいえば、来世での救済が約束されるということである。」[注17]と説明している。

これらをまとめると、「十字架を負う」とは、現世での罪の償いが免除され来世での救済を得ること、と言い表わすことができる。

ここで、第一回十字軍全体の位置付けと性格をまとめておきたい。十字軍は全部で第七回[注18]まで行われたが、中でも第１回十字軍は最も成功した十字軍といわれる[注19]。それは初期の目的、つまり、クレルモンにおける十字軍召集演説に示された「異教徒の侵略者トルコ人と戦いキリスト教徒を救援し、聖地イェルサレムを奪回する」という目的を目に見える形で達成した唯一の十字軍ということであり、この点では理想の十字軍と言える。

なお、このことは、第一回十字軍の最終目標であった聖地イェルサレム回復が達成されたのと同時に、十字の印を付け参加した人たちが「罪の償いが免ぜられ、来世での救済を獲得した（保証された）」ことを意味する。そしてまた同時に、十字軍の参加者は召集演説の第三項目にあった、トルコ人と戦って彼等を虐殺し、同第五項目、掠奪によって東方の富を獲得する、ということも達成したのである。これに関してヴェルディは十字軍の殺戮と掠奪に対する批判を、ロンバルディアの娘ジゼルダの歌[注20]によって表現している。

以上、歴史における第一回十字軍の位置付けと十字軍に参加した人々の特徴についてまとめた。なお、ジゼルダの歌は一例であるが、この他の音楽部分についても背景となる事柄と重ね合わせることで、作品の中における各音楽の意味や役割を考えることができる。

２．２　地理的背景〈ロンバルディア〉〈ミラノ〉〈アンティオキア〉〈イェルサレム〉

《ロンバルディ》は、イタリアのロンバルディア地方にあるミラノ（第１幕）、小アジアにあるアンティオキア[注21]とその近郊（第２幕）、そして西アジアのイェルサレム[注22]近郊（第３幕、第４幕）が舞台になっている。ここに登場する地方や都市は、いずれも歴史上重要な意味を持っている。特に、キリスト教とイスラム教という二つの宗教との関連において非常に重要な意味を持っている。

ここでは《ロンバルディ》が各幕で設定している場所について、歴史と宗教、またヴェルディとの関連も含め、各々の地方と都市について概観し、その特徴をまとめることにする。

注16 『世界史事典』旺文社（2001）p.354 「カトリック教会に功績のある者に対し、その罪への現世的な処罰を免除するために発行した証書。免罪符ともよばれる。」

注17 八塚（2008）p.38

注18 『世界史事典』旺文社（2001）p.332　第一回（1096年-99年）から第七回（1270年）までの７回。

注19 八塚（2008）p.92

注20 《第一回十字軍のロンバルディア人たち》第２幕の最終場面、【表１】⑤ロンド･フィナーレの中で歌われる。河原（2004）の対訳より、ジゼルダの該当部分最初の歌詞は次のとおり。「（ほとんど発狂せんばかりに）駄目！、神のご意志ではありません、人間の血を大地に捲き散らすのは…これは回教徒たちの黄金を狙った破廉恥な狂気、敬虔な感情ではありません！これは神の言葉ではなかったはず…決して、決して神はそう望まれなかったはず！」。これはト短調アレグロ・モデラートの前半カヴァティーナ部分で切々と（総譜declamato e sotto voceの指示, declamatoは叙唱、sotto voceは小声での意）歌われる。この後に続く後半カヴァレッタは、変ロ長調ピウ・モッソのマルカートで始まりト長調に転調、激しく（総譜con slancioの指示,slancioは猛進、爆発の意）歌われ（総譜string.sempreの指示）急速になりアリア中最高音二点変ロ音（フェルマータ付）を頂点に終わる。

注21 トルコ共和国のアンタキア（Antakya）。東地中海沿岸、南のシリア・アラブ共和国との国境近くに位置する。

注22 イスラエル共和国の首都、イェルサレム（Jerusalem）。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地。

２．２．１　〈ロンバルディア〉

ロンバルディアの名称は、６世紀に東ヨーロッパからこの地に南下したロンバルド族に由来している[注23]。一族は６世紀初頭にキリスト教に改宗しロンバルド王国を建国した。

王国が建設される４００年以上前の２世紀初頭には、既にポー川流域を中心に広がるロンバルディア地方にキリスト教が広がっていた。当時メディオラーヌム（Mediolanum）という名称で呼ばれていたミラノを中心として、キリスト教の重要な一教区として数えられていた。これは、この地域がイタリア北部で早くからにキリスト教が浸透し、その要所であったことがわかる。なお、ヴェルディがロンバルディアと地縁があることは既に記したのでここでは省略する。

２．２．２　〈ミラノ〉

現在ミラノは、ロンバルディア地方の中心地でイタリア第２の都市である。旧称メディオラーヌムの時代からイタリアにおけるキリスト教の重要な拠点の一つであったことは前項で記した。その後、ミラノが重要な都市となるのは次のことによる。

３１３年、コンスタンティヌスⅠ世によって「ミラノ勅令」が発令され、この勅令により、キリスト教はローマ帝国の公認宗教の一つになった。

ローマ帝国におけるキリスト教は、ネロ皇帝（在位５４～６８年）が６４年にローマの大火の罪を理由に大迫害を始めて以来、何度にもわたり迫害されてきた。ミラノの勅令は発令以降、迫害を国家が公式に否定するものとなる。後に、勅令の布告は歴史上大きな転換点を迎える礎となった。この公認を経た後の３９２年、テオドシウスⅠ世によりキリスト教はローマ帝国が認める唯一の国教となったのである。迫害から国教へ、キリスト教徒が迫害の苦難から解放された歴史の中で、ミラノは重要な意味を持つ都市になっている。

このテオドシウスⅠ世に影響を与えた重要な人物がいた。司教アンブロシウス（３４０年頃～３９７年)である。アンブロシウスはミラノの守護聖人であり､市の中心には彼を祀るサンタンブロージョ教会が建っている。《ロンバルディ》の第１幕はこの教会の場面から始まっている。そこがミラノの人々によって聖人と讃えられるアンブロシウスゆかりの地であることは作品の場面設定の背景としても重要な意味を持っていることがわかる。

ミラノはオペラにとっても重要な都市である。ミラノには、世界的な歌劇場の一つ、ミラノ・スカラ座がある。このスカラ座が１７７８年に開場した後、ミラノの劇場数は徐々に増え、「１８１５年までに２０以上にもなり、そのうち少なくとも半分は１年の一定期間にオペラを上演するようになっていた」[注24]。この劇場数は、オペラ史上重要な都市であったナポリを大きく上回っていた。ナポリは１９世紀前半のイタリア・オペラを代表する作曲家ロッシーニやドニゼッティのオペラ初演を数多く手掛けたサン・カルロ劇場を持つ歴史のある町である。そのナポリでさえ１８２０年代のオペラ劇場の数は僅か６劇場しかなかったことから考えても、ミラノがいかにオペラの盛んな都市であったかがわかる。

また、ミラノは、オペラ作曲家ヴェルディにとっても重要な都市である。ヴェルディのオペラ２８作品[注25]のうち、初期と晩年に作曲された１１作品がミラノ・スカラ座で初演されている。若きヴェ

注23 『世界史事典』旺文社（2001）p.823 「西ゲルマン人の一派で、ランゴバルド族ともいう」

注24 パーカー（1999）p.203

注25 作品総数の数え方は、小畑（2004）に従っている。ここでは《第１回十字軍のロンバルディア人たち》の改作《イエルサレム》は別作品とし、他改訂版等は別の作品とせず初版に含めて数えている。

ルディが音楽を学ぶために憧れて留学を志したのもミラノであり、彼がオペラ作曲家として楽壇にデビューしたのもミラノであった。１８３９年に彼の最初のオペラ《サン・ヴボニファーチョ伯爵オベルト》がこのスカラ座で初演が行われ成功を収めた[注26]。ヴェルディはミラノに対してこの他にも様々な感情（希望や失望など）を抱いている。これについては作曲家ヴェルディに関する背景として改めて考察したい。

以上のように、ミラノは、歴史・宗教・音楽においても、また、作曲家ヴェルディにとっても意味深い都市である。ヴェルディがこの台本に作曲することを決めた時、ロンバルディアという地名がそうであったように、物語りがミラノに始まりミラノの人々を中心描かれていた、というところにも強い関心を持っていたと考えられる。

２.２.３ 〈アンティオキア〉

アンティオキアは、現在のトルコ共和国の南部、地中海沿岸にある都市アンタキアとなっている。前項のミラノからイスタンブールを経て東へ約２５００㎞の位置にある。

古くアンティオキアはセレウコスⅠ世（B.C. ３５８頃～ B.C. ２８０）が西アジアに建国したシリア王国（B.C. ３０４～ B.C. ６４）の首都であった。アンティオキアは次の二点から重要な都市だと考えられる。一つは初期キリスト教布教時代にイェルサレムに次いで二番目に母教会が置かれた都市[注27]だったこと、もう一つはパウロ（生没年不詳）[注28]による宣教の起点となる都市だったこと、である。

紀元３０年頃にイェルサレムでキリストが十字架刑になった後、キリスト教はその弟子たちによって宣教が始められた。宣教はイェルサレムを中心に当時のユダヤ地方、サマリア地方へ、さらにその周辺地域へと遠心的に広げられた。イェルサレムの北、約５００㎞に位置するアンティオキアには、十二人の弟子の中で最年長であり代表的な地位を持っていたペテロが最初に司教区を作りパウロが現れるまで宣教の中心人物として働いた[注29]。その後、ユダヤ人であったパウロがここを異邦人への宣教の拠点とすることになる。

このアンティオキアでの教会は「最初の異邦人教会となった」[注30]とあるように、異邦人（主にギリシャ人等）が改宗した初めてのキリスト教会であった。その教会の信徒を「キリスト教徒」とする呼び方が初めて使われたのもアンティオキアであった[注31]。これは世界で二番目のキリスト教会、つまりイェルサレム以外の地で最初の教会であり、そして改宗した異邦人による最初の教会である。これは二つの意味で最初であり、キリスト教の歴史においてはどちらも重要な意味を持っている。

十字軍はイェルサレム遠征の途中、１０９８年にこのアンティオキアを攻略しイスラム教徒のトル

注26 小畑（2004）pp.39-40

注27 園部（1986) p.2 「母教会はエルサレム教会であるが, やがてアンテオケ教会が, 1 世紀末以後にはローマ教会が, 2 世紀末以後にはアレクサンドリア教会が, 330年の遷都以後にはコンスタンティノポリス教会が, 有力となり, これらの５つの教会は, 後年, 古代五大教会と呼ばれている。」

注28 『世界史事典』（2001）p.564 「小アジアのタルソス生まれのユダヤ人で、初めユダヤ教徒としてキリスト教の迫害者であったが、復活したイエスの声を聞いたと信じて回心し、以後、ローマ世界への福音の伝道につとめた。-中略-ローマ皇帝ネロの迫害により、殉教したと伝えられている。彼の説いた、イエスの十字架の死における贖罪的意義は後世のキリスト教世界に大きな影響を与えた。」文中の「十字架の死における贖罪的意義」は、本論２．１の歴史的背景で述べたように、後の十字軍思想に根底で繋がっている。なお、生田(2001)は、パウロの生没年を「A.D. １年頃～ A.D. ６７年」としている。

注29 八塚（2008）p.113

注30 山口（2000）p.56

注31 河原（2004）p.10

コ人支配から解放した。これは最初の宣教地教会の解放ということになる。《ロンバルディ》では、第２幕でアンティオキアの君主アッチャーノのアリアや十字軍の合唱によって両者の対立の様子が描かれている。また、この対立の中で、イスラム教徒であるアンティオキアの皇子オロンテが洗礼を授かり、イスラム教からキリスト教に改宗する場面が第３幕にある。異教を信じる異邦人が改宗するというこの場面は、ヴェルディがアンティオキアの持つ歴史上の重要な一つの側面をオペラの舞台に象徴的に再現したと考えられる。本論の１．２の項で、永竹氏によって「オペラとしては異例の」と評された【表１】第３幕⑧の前奏曲は、この「洗礼と改宗場面の直前」に置かれている。筆者はここに述べた背景をふまえ、この曲は《ロンバルディ》全体の中でもっと別の重要な意味があると考えている。

もう一つのパウロについて。彼はもとサウロと呼ばれたユダヤ人で、ユダヤ教の熱心な信仰者であった。彼はローマ帝国の市民でありその地位を利用して当時の新興宗教キリスト教と対立し激しい迫害を行った。しかし彼自身改宗[注32]し、その後キリスト教初代教会最大の宣教者[注33]と呼ばれるようになる。大迫害者から最大の宣教者へ、この大転換を遂げたパウロはさらに地中海を西へ進み、最後はイタリアのローマまで宣教旅行[注34]を行っている。その後ロ－マはローマ・カトリック教会の中心地となった。アンティオキアはこのパウロによるヨーロッパ宣教の拠点でもあった[注35]。

以上、アンティオキアは第一回十字軍遠征における要所でもあり、宗教上重要な都市でもあった。ヴェルディが《ロンバルディ》で描いた第２幕のアンティオキアの攻防、そして第３幕（前奏曲とそれに続く）異邦人アンティオキア皇子オロンテの改宗場面などは、こうした歴史や宗教の持つ背景を凝縮し象徴させた場面であると考えられる。

２．２．４ 〈イェルサレム〉

ここでは、イェルサレムについて、この作品に設定された１１世紀末（第１回十字軍遠征）までの変遷を中心にまとめた。前項のアンティオキアから南へ約５００㎞にある。

イスラエル共和国の首都[注36]で、地中海から約５０㎞内陸の丘陵地帯にあり、東に死海その北にヨルダン川が続いている。南東部にはシロアムの池があり、これは十字軍が飲料水を補給した重要な池であった。ヨルダン川もシロアムの池もオペラの台本に登場する。

１９世紀末から始まったシオニズム（Zionism）、つまりユダヤ人による祖国回復運動によって、この地、パレスチナ[注37]に多くのユダヤ人が移住した。彼等は１９４８年にイスラエル共和国を建国しイェルサレムをその首都と宣言した。以来、先住民のパレスチナ人（アラブ民族）との武力衝突が続いている。旧市街の中には、ユダヤ人地区（嘆きの壁）、キリスト教徒地区（聖墳墓教会）、イスラム教のムスリム地区（岩のドーム）、アルメニア人地区があり、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地となっている。

注32 新共同訳『聖書』日本聖書教会（1999）pp.(新)229-(新)230　サウロが回心したダマスコでのエピソードは、新約聖書の使徒言行録第9章1節～ 19節に書かれている。

注33 山口（2000）p.458　パウロは宣教旅行により宣教活動を行った他、キリスト教の教典である新約聖書の約４分の１に相当する「手紙」の著者でもある。

注34 パウロの宣教旅行は、アンティオケ教会による任命派遣の第１回～第３回までアンティオケを起点に行なわれわれた。第４回目はイェルサレムを起点とするローマへの宣教旅行であった。

注35 アハロニ、Y./アヴィ＝ヨナ、M.（1988）pp.154-155　第１回～第３回伝道旅行はアンティオキアが起点。

注36 正井（2009）p.169　首都としては「国際的には未承認」（国連が認めていない）。

注37 パレスチナ（Palestina）とは、地中海南東岸、シリアとエジプトの間の地域。

イェルサレムはB.C. １４００年頃歴史に登場する。もともとカナン人が住んでいたが紀元前１３世紀にヘブライ人（セム語族の一派）[注38]がこの地に侵入した。紀元前１２世紀頃にはペリシテ人（非セム系パレスチナ人）が侵入して支配。その後、ヘブライ王国はダヴィデ王（在位B.C. １０００年頃～ B.C. ９７０年頃）時代のB.C. １０００年頃にイェルサレムを占領し王国の首都とした。そして、次のソロモン王（在位B.C. ９６１年？～ B.C. ９３２年）の時、ヘブライ人はイェルサレムに神殿を建設し、その中に契約の箱[注39]を納めユダヤ教の中心地とした。

B.C. ５９７年とB.C. ５８６年、イェルサレムは新バビロニア王国（B.C. ６２５年～ B.C. ５３８年）のネブカドネザル２世（在位B.C. ６０４年～ B.C. ５６２年）による侵攻を受け、神殿が破壊され大勢のヘブライ人(= ユダヤ人)が捕えられてバビロンに連れ去られた。これをバビロン捕囚[注40]という。B.C. ５１５年、新バビロニア王国を滅ぼしたクロス王によりイェルサレムに帰還したヘブライ人は神殿を再建する。以降、紀元前はアケメネス朝ペルシア帝国（B.C. ５５０年～ B.C. ３３０年）セレウコス朝シリア王国（B.C. ３１２年～ B.C. ６３年）、そしてB.C. ３４年にユダヤ王国（B.C. ３７年～ A.D. ４４年）のヘロデ王（在B.C. ７３年頃～ A.D. ４年頃）が占領、その後ローマ帝国（B.C. ２７年～ A.D.[注41] ３９５年）の支配下に置かれた。

ローマ帝国時代のB.C. ４年頃、イェルサレムの南７㎞ほどにあったベツレヘムで、キリスト教の創始者、イエス・キリストが生まれた。イエスは３０歳の頃、イェルサレムの東を流れるヨルダン川[注42]でヨハネから洗礼を受け[注43]、イェルサレム及びその周辺で宣教活動を行う。しかし、その教えに既存のユダヤ教を否定する内容があったことから、ユダヤ教司祭らと対立、イエスは彼等によって当時の総督ピラトに告訴される。ここにユダヤ人とイエス（あるいはイエスの教えを信じる人）、つまり狭義のユダヤ教徒とキリスト教徒の対立が生まれた。イエスはイェルサレム内の家屋で弟子達と最後の晩餐を催した後、ユダの裏切りによりイェルサレム東のゲツセマネでユダヤ人によって捕らえらた。そして総督ピラトによる審問の後、十字架刑を宣告されゴルゴダの丘で十字架刑となった。以降、弟子達によるキリスト教の宣教が始まる[注44]。イエスの死後、ローマ治世における社会の混乱が激しくなる中、７０年にローマ帝国皇帝ヴェスパシアヌス（在９年～７９年）は息子のティトゥス

注38 『世界史事典』（2001）p.666 「前2000年紀にユーフラテス川流域からシリアに移り、一部はエジプトに移ったが、前１３世紀にモーセに率いられてエジプトを脱出し、パレスチナに建国した。その後、あいつぐ政治的非運のなかでユダヤ教を創始し、キリスト教の母体となった。アレクサンドロス王の支配、ローマ帝国に征服されたのちは、世界に四散し、ユダヤ人と呼ばれる。」この世界に四散したユダヤ人が後にシオニズム（= ユダヤ人の祖国回復運動）によってパレスチナへ回帰することになる。その目的はパレスチナ（注37参照）にユダヤ人国家を建設することである。

注39 山口（2001）p.215　別名「神の箱」。モーセの十戒が書かれた二枚の板が入っている。

注40 『世界史事典』（2001）p.577　第１回B.C.597、第２回B.C.586、一般には第２回をさす。ヴェルディは「バビロン捕囚」を題材にした台本に第３作目のオペラ《ナブッコ（ナブコドノゾール）》を作曲。囚われのユダヤ人の解放を描き、ユダヤ人が歌う合唱曲〈行け､我が想いよ､黄金の翼に乗って〉は特に有名である。この作品の次に続いて本作品《第一回十字軍のロンバルディア人たち》が作曲された。

注41 以下、A.D. は省略する。

注42 Barker（2002）Map11　地図の中にイエスが洗礼を受けた場所が示されている。死海の北約２０㎞、ヨルダン川の東岸となっている。
なお、ヨルダン川は《第一回十字軍のロンバルディア人たち》第３幕で出て来る。イスラム教徒の皇子オロンテが改宗のため洗礼を受ける場所が「ヨルダン川の岸が見える洞窟の中」であり、その洗礼に使う「水」も陰者がヨルダン川から汲んできた水、つまり、キリストが洗礼を受けたのと同じ川の水である。

注43 山口（2000) p.59 「イエスは故郷のナザレを出ていき､バプテスマのヨハネからバプテスマを受けた.」
ヨハネはイエスの１２人の弟子の一人。新約聖書の「ヨハネの福音書」「ヨハネの手紙１～３」「ヨハネの黙示録」の著者。ヨハネによるイエスの洗礼は「マタイによる福音書」3章13 ～ 17節、「マルコによる福音書」1章9 ～ 11節に書かれている。

注44 『世界史事典』（2001）p.51 「-略-　イエスはゴルゴダの丘で十字架にかけられたが、弟子たちの間にイエスの復活が信じられ、やがてキリスト教が形成されるに至った。」

にイェルサレム攻略を命じた。この時犠牲者は１００万人を超え、イェルサレムは破壊され壊滅状態となった[注45]。

東ローマ帝国（３９５年～）支配下の６１５年、イェルサレムはゾロアスター教[注46]を国教とするサザン朝ペルシアの支配下となるが、６３５年にはイスラム教のイスラム帝国（６２２年～７５０年）によって征服される。このイスラム帝国は、アラビア半島中西部、紅海沿岸の都市メディナを起点にマホメット（５７０年頃～６３２年）が創始したイスラム教の布教とともに拡大した勢力であった（前出のアンティオキアも同じ頃にイスラム教徒により侵略されている）。マホメットはアラー（アラビア語で「神」の意）をイスラム教の唯一絶対の神とした。オペラの中でアラーは、イスラム教徒たちの「畏れるアラーの神よ」や、キリスト教徒たちの「無分別なアラー…」という合唱の中で歌われる。

１０７１年、イスラム教に改宗したセルジューク朝トルコ（１０３８年～１１９４年）がイェルサレムを占領、キリスト教徒の迫害、聖地巡礼の妨害が行われるようになった。これが原因となり１０９６年、第１回十字軍の遠征が行われることになった。

１０９９年、第一回十字軍によりイェルサレムはキリスト教徒の手に戻り、イェルサレム王国（１０９９年～１２９１年）が建国された。しかし、１１８７年にはエジプトのサラディンにより奪回される。以降、長くイスラム勢力の支配下に置かれた。現在、約３０００年前に最初に建設され、後に徹底的に破壊されたユダヤ教の神殿の跡地には、７世紀になって建てられた岩のドーム[注47]と呼ばれるイスラム教の礼拝堂がある。

以上、現代までに及ぶ約３４００年を超える長い歴史の中で、イェルサレムは様々な宗教を持つ民族や国によって侵略され破壊と再建が繰り返され今日に至っている。《ロンバルディ》第４幕の最終場面は、十字軍遠征の最終目標を達成したロンバルディア人たちが城壁に囲まれたイェルサレムをその近郊から眺めるところで終わっている。ヴェルディはこの最後の場面を、三人の主要な登場人物（兄アルヴィーノ、弟パガーノ、兄の娘ジゼルダ）と十字軍および巡礼のロンバルディア人たちの合唱によって締めくくっている。その音楽にはロンバルディアの人々によって歌われるある種の熱望や希望といったものが込められているように感じられる。ここではイェルサレムの歴史の一部分に触れたに過ぎないが、オペラの最終場面に書かれた音楽から伝わるそうした熱望や希望というものは、こうした歴史的背景を考えること無しに感じ取ることはできないであろう。

以上、《ロンバルディ》の中で設定されている主な場所について、その特徴をまとめた。また、地理的な位置関係も確認した。ここで注意しておきたい点がもう一つある。それは、オペラではそれぞれの都市間を移動する経過が省略されていて、十字軍が遠征に費やした大部分の時間は舞台上では描かれていないということである。例えば、第１幕でミラノを出発したあと、第２幕の開幕で我々は瞬時に２５００㎞離れたアンティオキアの場面を舞台上に見る。第３幕のイェルサレム近郊も同様である。この間、実際の十字軍は想像を絶するいくつもの過酷な状況下に置かれている。こうした背景もオペラの音楽に重ね合わせて聴く想像力を持つことが大切だと思われる。なぜなら、それによって次の幕で目にする舞台が違って見えるようになるからであり、同時に、次の音楽の聴き方も変わるから

注45　園部（1986）pp.8

注46　『世界史事典』（2001）p.424　ゾロアスター教「前７世紀メディアの予言者ゾロアスターが創始したペルシアの宗教。拝火宗教ともいう。」

注47　ibid., p.67　金色の半球形ドームを持つ建物で現在も旧市街にある。この建物の中央の岩から、イスラム教の創始者マホメットが昇天したと言われている。

である。作品の背景はこのような状況の中でも我々に影響を与える重要な要因となる。

２．３　宗教的背景　〈ユダヤ教〉〈キリスト教〉〈イスラム教〉

《ロンバンルディ》の人物関係では複数の異なる対立が見られる。そこに宗教的な要素を加えると、兄アルヴィーノと弟パガーノは同じキリスト教を信じる者同士の対立、十字軍遠征に参加しているロンバルディア人と彼等の目的地を占拠しているトルコ人の対立はキリスト教（ロンバルディア人）とイスラム教（トルコ人）の対立となる。後者ではそれぞれ自分たちが信仰する神を称えその加護を求めて祈り､対立する相手が信仰する神を非難し侮辱するといった内容が主に合唱で歌われる。この他、兄アルヴィーノとその娘ジゼルダの二人については、同じキリスト教の下で対立と批判の関係にあることは既に述べた通りである。これらの対立は、オペラの最後にそれぞれ解決される。ここでは、この作品がキリスト教対イスラム教という二つの宗教の「争い」を描くことだけに終始していない点が重要である。

音楽面で登場人物が宗教的心情を強く表出する場面は各所にある。その中で合唱もその役割を担う場面を多く与えられていることに気付く。このオペラではソリストに加え合唱によってこうした部分が多く歌われている。一般にオペラではソリストのパートが音楽の中心に感じられるため、合唱の部分は聞き過ごしてしまうことがある。しかし、ここで宗教的背景を視点に音楽を捉え直すことで、作品における合唱の重要性が浮かび上がり、ソリストと合唱それぞれの音楽の役割についても再考することができる。

ここで前出の二つの宗教に加え、もう一つ別の宗教も考慮しておきたい。それはユダヤ教である。オペラでは直接表面に出てこないため分かりにくいところがあるが、既に歴史や地理の背景でも触れたように、ユダヤ教はキリスト教がその一部分としている共通の教典（旧約聖書）から成立していること、最終場面のイェルサレムがユダヤ教の聖地でもあることなど、作品の背景の一つとして考慮しておくべき点が多くある。

《ロンバルディ》が基本的にはキリスト教を主体に作られている、と考えるならば、ユダヤ教やイスラム教は異教である。しかし、ヴェルディのオペラから聴こえて来る音楽は、キリスト教を含めそれぞれの宗教を超えたところに新しい到達点があることを伝えようとしている､と筆者は考えている。ここではユダヤ教を含め各宗教の特徴と相互の関係を中心に把握しておきたい。三つの宗教の基本事項をまとめたものが【表２】である。

２．３．１　〈ユダヤ教〉

紀元前６世紀、バビロン捕囚[注48] から解放されたヘブライ人（=ユダヤ人）がイェルサレムに神殿を建設、ここを拠点に成立した。トーラー[注49] を教典としモーセの十戒（律法）を忠実に守り、教会堂での礼拝を行った。創造主たる神を信仰する一神教であり、一切の偶像崇拝を否定している。イェルサレムの神殿を中心に、周辺各地に会堂（シナゴグ）を建設しそこを拠点に宣教した。自分達は選ばれた民であること（選民思想)、約束の地（カナン＝パレスチナ）が与えられること、救い主（メシア）が遣わされることを約束されているという預言を信じている。後に成立するキリスト教の母体宗教である。

注48　本文2.2.4〈イェルサレム〉及び注40を参照。
注49　荒井（1997）pp.14-16　正典は『トーラーとネビイームとケトゥビーム』と呼ばれる。

ユダヤ教徒がパレスチナを追われ離散したのは１～２世紀にローマ帝国による追放が行われたことによる。しかし、それが決定的になるのは、１１世紀末に始まる十字軍がこの地を襲撃したことよるという[注50]。これは今日の、聖地（約束の地）の獲得と国家建設を目指すというパレスチナ問題に繋がる。十字軍はこの問題と深く関っていたのである。

２．３．２ 〈キリスト教〉

紀元１世紀、イエス・キリストによって創始された。彼はユダヤ教の教典である旧約聖書に預言されたメシヤ（救世主）であると宣言したが、それを認めないユダヤ人との間に対立が生まれた。ユダヤ教の教典である旧約聖書に加え、後に書かれた新約聖書をその教典としている。イエスは律法を厳格に守るユダヤ教から人々を解放し、選ばれた民という優越的な選民思想を否定、民族や階級を超えて誰にでも神の恵みと救いがあることを説いた。また権威主義に陥ったユダヤ人聖職者たちを厳しく批判した。キリスト教ではこのイエス･キリストを旧約聖書で預言されている救い主としている。（初期キリスト教の宣教拡大等については、本文２．２の地理的背景で記したのでここでは省略する）

６世紀末、教皇グレゴリウスⅠ世（在位５９０年～６０４年）時代にローマ教会は教皇権を確立し勢力を拡大し、さらに布教活動を強化した。また、グレゴリウスⅠ世の貢献により、教会（カトリック）典礼音楽[注51]が発展し普及した。

１１世紀に教理の違い等から西のローマ・カトリックと東のギリシア正教会に分裂。十字軍は西方教会が起こした遠征であった。十字軍の時代､カトリックは宗教裁判を行い異端審問と処刑を行った。ジャンヌ・ダルク[注52]も異端とされた一人である。

その後、教会制度の硬直化や教皇権力の強化に対する批判、聖職者の堕落と教会による財産の搾取（贖宥状）に対する改革思想が高まり、１５１７年ルターによる宗教改革が起こる。この改革派は後にプロテスタントと呼ばれる。１６世紀～１７世紀キリスト教は各地で改革の時代を迎え、同時に従来のカトリックと改革派との間に対立が生まれた。

１７世紀、旧教カトリックと新教プロテスタントの対立はドイツ（神聖ローマ帝国）を中心に３０年戦争（１６１８年～１６４８年）へと発展した。この戦争は、歴史上最後で最大の宗教戦争とされる[注53]。

キリスト教はその初期における迫害への抵抗と異邦人や異教徒との戦いを経て、中世には教皇を中心にその権威と勢力を増した。しかし、十字軍の終焉とともに教皇権も衰退していった。宗教改革期には改革とともに対立が生まれ、キリスト教徒同士の戦争が行われた。１６世紀以降、キリスト教はヨーロッパから、世界各地へと拡大、様々な教団・教派が生まれた。今日、これらの派生した教団・教派の中から再びキリスト教としての統一を提唱する動きが生まれている[注54]。

注50 広川（2007）p.204

注51 教皇グレゴリウスⅠ世の名にちなんで「グレゴリオ聖歌」と呼ばれる。ローマ・カトリック教会で歌われる無伴奏の単旋律聖歌のこと。９～１１世紀に最盛期を迎え、その後多声音楽聖歌が歌われるようになった。

注52 ヴェルディはジャンヌ･ダルクを題材とするシラーの戯曲『オルレアンの乙女』を原作にしたオペラ《ジョヴァンナ･ダルコ》（1845年初演）を作曲している。

注53 『世界史事典』（2001）p.292

注54 久米（2007）p.239 「エキュメニズム」と呼ばれる。２０世紀、多数に別れたキリスト教の諸派が各教会の教理を超えて相互に一致協力する（一つになる）という運動。

２．３．３ 〈イスラム教〉

イスラム教はムハンマドによって創始された。若い頃にシリア地方でユダヤ教やキリスト教にも接し思想的影響を受ける。６１０年、４０歳の頃、アッラーの神から啓示[注55]を受ける。以降、預言者として啓示を説きメッカを中心に布教活動を行った。ムハンマドも種族や階級によらずアッラーの神のもとにすべての人は平等であることを説いた。

イスラム教では、教典に基づいて儀礼的規範や法的規範があり、礼拝や断食、巡礼などの義務等もそこに含まれている。多神教を否定し、一神教で偶像礼拝を禁じている点はユダヤ教・キリスト教と同じである[注56]。

ムハンマドの死後、７世紀ウマイヤ朝（６６１年～７５０年）と続くアッバース朝（７５０年～１２５８年）時代に、イスラム帝国領地拡大とともに西はイベリア半島南部から東はインドのインダス川流域に至るまで一気に広がった。１０世紀にはイタリアの南、シチリア島やサルディーニャ島にもイスラム教の布教が行われた。

１２５８年、モンゴル侵攻でアッバース朝が滅び、イスラム教は古典時代から中世イスラム教時代へと移る。１４９２年、イスパニア統一によりイスラム教はイベリア半島から追放され、その後次第に西欧諸国の植民地支配の下に置かれることになる。創始以来、イスラム教も多くの宗派に別れ、それぞれの派の間で対立と抗争が続いている。１９世紀には西洋に対する危機意識の高まりからイスラム教の統一と強化への動き[注57]が生まれた。

【表2】

	ユダヤ教	キリスト教	イスラム教
成立時代	B.C. ６世紀	１世紀	７世紀前半
場所	イェルサレム	イェルサレム	メッカ
創始者 生没年 (生地)	ヘブライ人（ユダヤ人）	イエス・キリスト B.C. ４頃～ A.D.30	ムハンマド A.D.570頃～ A.D.632
	–	（ベツレヘム）	（メッカ）
教典 ・ 聖典	トーラー（ = 旧約聖書 ）	旧約聖書 ＋ 新約聖書	コーラン
	ヘブライ語	ヘブライ語　ギリシャ語	アラビア語
	トーラーは、A.D.10 ～１世紀モーセ他複数の預言者らによって書かれた。「創世記」から始まる律法(5), 預言者(21), 諸書(13) が収録されている。３９書から成る。	旧約聖書は左記と同じ。新約聖書はイエスの死後２世紀までの間に弟子達によって書かれた。福音書(4), 歴史書(1), パウロの手紙(13),その他の手紙(8), 預言(1)　が収録されている。 ３９書(旧約) ＋ ２７書(新約)。	コーランは７世紀､神(アラー)がムハンマドに啓示したものを彼の死後収録したもの。「開巻の章」(第１章) ～「人々の章」(第114章)が収録されている。１１４章から成る。

注55 中村（2006）pp.35-36　啓示内容は以下５項目に集約される。「①神の力と恩恵　②復活と最後の審判　③神に対する人間の対応としての感謝と礼拝　④施善、特に喜捨の勧め　⑤ムハンマドの預言者としての使命」

注56 宮田（2006）p.30 「神が唯一であるという教えは、イスラームの預言者であるムハンマドが初めて説いたわけではない。-略- キリスト教もユダヤ教も、またゾロアスター教も、唯一神を持つ宗教で　-略-　共通の概念がある。」

注57 中村（2006）p.206 「サラフィーヤ運動」という。

宗教背景では、①ユダヤ教を母体宗教にキリスト教が成立し、そのユダヤ教・キリスト教の影響を受けた創始者によってイスラム教が成立している[注58]　②それぞれが互いに相容れない独立した別々の宗教であることは確かであるが､見方によって共通していることも多い　③どの宗教も分離（分派）と統一など、歴史的な変遷の中で共通する現象が起こっている　という三つを確認しておきたい。その中でも特に③が重要である。

オペラでは同じ宗教を信仰する者同士の対立と和解、異なる宗教間の対立と戦争による解決、また改宗による一致､といったことがドラマの展開として描かれている。《ロンバルディ》というオペラは、そうした関係を総て統合した中に、上記③の各宗教が共通して目指そうとしている「再統一」という世界の縮図を描いた作品なのではないか、と筆者は考えている。

まとめ

オペラ《ロンバルディ》を取り上げ、その背景となる歴史・地理・宗教について考察した。ロンバルディア人が中心であること、彼等がキリスト教徒であること、対立と批判から和解と平安へ帰結することなど、オペラの内容をそれぞれの背景と関連させながら作品の特徴について考えた。

１.の概要では､「物語り」や「音楽」という単一の側面からオペラの主人公を導き出した場合、その役割や配分に違いがあることを明らかにした。２.では、歴史・地理・宗教を作品の背景として設定し、それぞれの背景の内容に作品全体における各登場人物の役割やその音楽の特徴を結びつけて考えた。歴史では、十字軍についての理解をもとに、作品に登場するロンバルディア人が置かれた状況を推察した。そして、アリアを例に背景と音楽内容を関連させた楽曲の解釈を示した。地理では、歴史や宗教の観点も含めた背景の考察に基づいて、第１幕から第４幕の場面に描かれた情景の理解を深め、さらに時間の経過を意識した場面の連続性が重要であることを指摘した。宗教では、その歴史的変遷を辿ることによって現代に至る動向の特徴を明らかにし、その背景をふまえて作品全体の内容に対する筆者の考えを述べた。いずれも各背景の考察から作品を見直す有益な手がかりを得られることがわかる。

以上、作品の背景に着目してその事実とオペラの内容を比較し検討を行った結果、そこには作品に対する幅広い見方や聴き方を可能にする視点が含まれていた。劇音楽の教材研究では、台本の台詞の中に作品の特徴を解き明かす糸口がある。そこから選び出した言葉の向う側に広がる背景の世界を知りたいという欲求、その言葉に作曲された音楽から何かを感じ取ることのできる感性、そして両者を適切に結び付け作品の本質に迫る新しい解釈を開拓する思考力が必要である。より多くのオペラから様々な背景を探ることによって、その力は少しずつ高められるはずである。

本稿では《ロンバルディ》について、歴史・地理・宗教という作品の内容にかかわる主要な背景の考察を終えた。この他に、作曲者ヴェルディとこのオペラに関する背景を加え作品の背景に着目した教材研究全体を完結したいと考えている。

注58　広河（2007）p.201　この三つの宗教は「姉妹関係にある三大啓示宗教」だと記している。

引用・参考文献

〔ヴェルディ / オペラ関係〕
岡田暁生（2001）『オペラの運命』中公新書　中央公論新社
小畑恒夫（2004）『作曲家◎人と作品　ヴェルディ』音楽之友社
オーベルドルフェル、アルド（2001）『ヴェルディ　書簡による自伝』松本康子訳　カワイ出版
河原廣之（2004）『対訳　第一次十字軍のロンバルディア人達』おぺら読本出版
キューナー、ハンス（1994）『ヴェルディ』岩下久美子訳　音楽之友社
タロッツィ、ジュゼッペ（1992）『評伝　ヴェルディ　第Ⅰ部　あの愛を……』小畑恒夫訳　草思社
永竹由幸（1993）『オペラ名曲百科（上）イタリア・フランス・スペイン・ブラジル編』音楽之友社
永竹由幸（2002）『ヴェルディのオペラ　全作品の魅力を探る』音楽之友社
パーカー、ロジャー（1999）『オックスフォード　オペラ史』大崎滋生監訳　平凡社
『オペラ辞典』（1993）音楽之友社

〔十字軍関係〕
タート、ジョルジュ（2001）『十字軍―ヨーロッパとイスラム　対立の原点』池上俊一監修　南條郁子他訳「知の再発見」　双書３０　創元社
橋口倫介（1974）『十字軍』岩波新書　岩波書店
ホプキンス、アンドレア（2005）『図説　西洋騎士道大全』松田英他訳　東洋書林
八塚春児（2008）『十字軍という聖戦　キリスト教世界の解放のための戦い』NHK ブックス 1105　日本放送出版協会
山内進（1997）『北の十字軍』講談社選書メチエ　講談社
山内進（2003）『十字軍の思想』ちくま新書　筑摩書房
『新明解国語事典　第二版』（1974）三省堂
『世界史事典　三訂版』（2001）旺文社

〔地理関係〕
アハロニ、Y./ アヴィ＝ヨナ、M.（1988）『マクミラン聖書歴史地図』池田裕訳　原書房
立山良司（2007）『エルサレム』新潮選書　新潮社
月本昭男監修（2009）『図説　聖地エルサレム』　青春新書　青春出版社
広河隆一（2007）『パレスチナ　新版』岩波新書　岩波書店
正井泰夫監修（2009）『世界　大地図』小学館

〔宗教関係〕
荒井章三（1997）『ユダヤ教の誕生』講談社
モリスン、M./ ブラウン、S.F.（2004）『ユダヤ教　改訂新版』秦剛平訳　青土社
久米博（2007）『キリスト教　その思想と歴史』新曜社
園部不二夫（1986）『図説キリスト教史』創元社
中村廣治郎（2006）『イスラム教入門』岩波新書　岩波書店
宮田律（2006）『中東イスラーム民族史』中公新書　中央公論新社
ワット、モンゴメリー（2002）『ムハンマド　預言者と政治家』牧野信也他訳　みすず書房
森孝一 編（2009）『ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教は共存できるか―　一神教世界の現在』明石書店
『コーランⅠ』（2009）藤本勝次他訳　中公クラシックス　中央公論新社
『コーランⅡ』（2009）藤本勝次他訳　中公クラシックス　中央公論新社
『新改訳　聖書』（2000）日本聖書刊行会
『エッセンシャル聖書辞典』（2000）山口昇監修　いのちのことば社出版部
Barker, Kenneth L.(ed.), *Zondervan NIV Study Bible,* Zondervan, Michigan,（2002）

〔楽　譜〕
Verdi, Giuseppe. *I Lombardi alla prima crociata : Dramma lirico in quatro atti* . , Ricordi（2007）